

屋連中は三萬圓位の金を使ったでせう、下麻生村も大分金を使ったらしいです。

「編者註」下麻生町は其倍の五、六萬圓も使った由。尚ほ之の騒動の際に於ける下麻生村方面の動向に就いては同じ日の座談会で述べられた村瀬八重八氏（下麻生村出身）の興味ある御話しを参考までに記載すると次の通りである。

「從來綱料が幾ら、搔下げ料が幾らと云ふ定まりであったが高過ぎて到底堪えられぬ、假令水面使用權は下麻生が持つて居ても切下げは自由だと、名古屋側が主張したのが喧嘩の始まりで、今組長の御話のやうな騒ぎになったので、下麻生では悲壯な決心をした、懲役に行くもの死ぬものがあつたら食はしてやる、嬢も小供も全部これにかゝれ女は御宮にお籠りせよ、男は全部之に掛かれと言ふので、名古屋側は對岸の吉田の方から向つて来る、下麻生側は之に對抗して持つてゐると云ふ按鹽で喧嘩をしてゐる中に訴訟が段々訂じて、終いには執達吏が来る、一方は差押へをさすまいとして下し筏に二十人も乗るから執達吏が皆溺れる今度は執達吏が告訴する檢事が来て、やった連中は檢來すると云ふ、連れて行くなら全部連れて行け、と云ふので實にえらい騒動でありました云々。」

以上で如何に之の騒動が猛烈であつたかを知る事が出来よう。

扨て本題に戻り。

## 日露の役と出征

三十五年當時既に日露の風雲頗る險惡急を告ぐるものあり、ために軍隊に於ける練兵は極めて嚴格且猛烈なる訓練を敢行され一月、二月の酷寒にもシャツ一枚、作業服のみで演習に次ぐ演習を勵まされ、或時は乗馬のため内蜜にズボン下を用ひない等の事もたまにはあつたが、それでも更に寒さを感じず如何に勇氣のありしかと、精神の緊張し居りしかを、寒さに逢ふ毎に今尚ほ思ひ出す次第である、斯様な連日の軍務に忙殺され、家庭の事など色々と苦慮しつゝもいつしかに三十六年の春去り夏過ぎ秋も逝き一ケ年は無事軍務を遂行して二等兵となつた、三十七年となるや層一層日露の風雲は加速度的に險惡化し遂に二月六日、日露國交斷絶、直ちに動員下令となり、同八日には旅順口攻撃があり、同十日對露宣戰を布告するに至つた、著者も動員下令と共に歩兵第六聯隊第二大隊大行李附として出

征することになったが二時間程の間に變更され相州平塚へ向けて徵發馬匹委員助手を命ぜられて同日午後十一時出發したのである、其當時の市内其他の混雜状態は非常なものであった、平塚にて十日間徵發事務に當り十一日目に馬匹列車の列車長となつて歸名した、然して其後留守隊にあつて、病馬厩の助手に命ぜられ病馬の治療に専心したが此の間同輩の富永輜重一等兵は若干中等教育を受け居りしたため獸醫候補生を志願し結局非常時が幸ひして見習士官相當官となりしも著者は遺憾ながら其學問上の素養に足らざるところありて、爲せば爲し得る身の上ながら切齒扼腕、血涙をのみて日々獸醫助手として精勵したのであつた、かくして其年五月には輸卒の教管助教を命ぜられ留守隊に復歸して輸卒に對する軍務助教の任に當つて四ヶ月を過し、九月十日遂に出動命令を受けて名古屋出發、同月十八

タルニ

日清國盛京省青窪泥即ち今の大連に上陸、それより各地に轉戦、媾和締結と共に明治三十九年一月二十二日名古屋凱旋、西區袋町在延命院を宿舍として召集解除の日迄數日間を部下數十名と過した。次で一月二十六日召集解除され、著者は自己の住む家なきため主家濱木屋へ凱旋したのである、出征中の思い出として忘れ得ぬ事は種々あるが多くは割愛して最も印象に残る事柄に就いて述べれば、小學校の同窓生で且つ親身の從弟なりし佐治伍長ツトに記載された私の書翰を以つて示したいと思ふ。

二七會發起人の方々の手により再生した同窓會はぼんやりと過去といふ文字に秘め、忘れはてたその過去をたずね、現在の交誼を暖める所謂、溫古知新の有意義の會とし且不幸にして死亡した我が同窓の靈を慰むる催しと承つて私は如何に感激した事でありませう、そして御送附下されし會員名簿の消息不明欄中に日露役名譽の戦死者佐治藏三氏を見出して遂に今日我等打ち揃ふてその靈を追弔するを得るのも奇しき因縁と考へます、故人について當時の事を頭に浮ぶまゝ筆にしたいと思ひます。

時は日露交戦酣にして遼陽も遂に陥落し我軍は沙河へと兵を進めた、今日と云ふ日も沙河の突撃戦を以て終り、日正に西へ没せんとする時、私は第三師團兵站部の部員として同地を距る南一里半の煙臺附近に勤務致して居りました、そうして御國の爲に之の身を献げて疲弊困憊し切つた負傷兵に握り飯二個と鶏卵一個とを給與致してその勞をねぎ

らってゐました、夕もやはあたりを閉じ夜のとばりを下した満洲の野に立つたこの身はがやがやと忙しく立働らく部員の喧騒の中にあつて、何かしらむなさはぎがして氣が落付かなかつたのです、「おい加藤君じゃないか」と呼ばれてふりかへるとそれは負傷した一戦友でありました、お互に無事を祝して四方山の話に耽ける時第一に友の口を突いて出た言葉は佐治伍長の戦死でありました、名古屋から宇品、宇品からダルニー（大連）ダルニーから第一線に立つ爲に遂に袂をわかつて行つた彼が「お互にどちらが先にやられるかも知れぬが骨はひろつてくれ、又親許へも假令身は死しても草を結んで御國の爲に盡す覺悟だ」と傳へてくれとダルニー埠頭でたてた誓の言の葉、彼の姿、私の頭の中は何かでぐつとおしつけられた様な重苦しさを感じてじつとしては居られませんでした、任務終了後隊長の許可を得て曉明に滿洲の草原に馬を驅つて友に教へられた地点につきました、それは沙河の會戦で歩兵第六聯隊の最も苦戦した地点でありました、嗚呼、何たる悲愴なる姿でせう、馬から下りて血に採どられた野の小さな草花を摘んで手向け私の手はかすかにふるつて止みませんでした、そこにひざまづいて瞑目合掌し今は

て早や幽明、堺を異にする友の亡骸を抱いて男泣きに泣きました、やっと支那村落にたどりついて茶碗を求め、友への最後の御別れをしました、私は友の死の様子を之れ以上書くに忍びません。

然し乍らこゝに數十星霜を経た今日皆様に友の最後を御知らせ申し上げて、我が二七會に榮光を添へばやと思ひ禿筆を運ばせたのであります、最後に共に故人も生存者も一堂に會し今は昔の思ひ草を、或ひは語り或ひは聞かせて一日を昔の眞の學生氣分で送れる事を過去、現在、將來と永久に忘れざる記念と致すのを誠に喜ぶ次第であります。

これが日露役出征中の思い出の一つである、扨て著者は明治三十九年四月一日に日露役の功に依り勳八等白色桐葉章並に一時賜金二百圓を賜り、皇恩の厚さに感泣した。

著者は出征中大なる負傷、病氣等に冒される事もなく、危険なる場面にも幾度か遭遇したるも兎に角無事に凱旋するを得たるに心の底から之れを喜び迎へてくれる人もなく誠に寂寥たる心中を如何する事も出来なかつた、勿論主人を始め伯父伯母等は喜び迎へては下すつたが其間尙ほ心中一抹の哀愁を禁じ得なかつた。